

# 思い出コミュニケーションを促進する都市写真の共同鑑賞法

## Method to promote communication of a memory by the panoramic photograph

齋田 萌<sup>\*1</sup>  
Saida Moe

川嶋 稔夫<sup>\*1</sup>  
Kawashima Toshio

木村 健一<sup>\*1</sup>  
Kimura Kenichi

<sup>\*1</sup> 公立はこだて未来大学大学院システム情報科学研究科  
Graduate School of Systems Information Science, Future University Hakodate

In this study, we introduce that the panoramic photograph of the Meiji period is effective as a material for talk of memories by citizens. We designed place to talk of memories for citizens in Hakodate city museum. As a result, it was found that it is effective to combine geographic information of Meiji era and current, and to find landmarks from the photograph.

### 1. はじめに

地方博物館はその都市の歴史を辿ることができる場であり、そこには学芸員が質の高い歴史資料を用いて研究した多くの成果が存在する。一方で、市民は都市の変遷や過去の出来事を自ら体験しており、それらを「思い出」として他者に語ることができる。従来、博物館は知識を得るだけの場であったが、市民の持つ記憶や文化といった資源を取り入れることで、市民と共につくる博物館に発展していく可能性がある。

そこで本研究では、博物館の歴史資料を素材とした市民の語り合いに着目した。川嶋・木村は、複数人でコミュニケーションを行いながら展示物を鑑賞する共同鑑賞を通じて、学芸員のもつ背景知識とは異なる理解が鑑賞者からもたらされている様子を報告している[川嶋, 木村 2011]。共同鑑賞によって、展示物の新たな見方や解釈が生まれることが期待されている。

また、思い出を語り合うことは、自分の過去との継続性を保証し、人とのつながりを再確認することができる行為である。人と思いを語り合うことは単純なおもしろさを持つだけでなく、自分のことを知ってもらうことや相手がどのように生きてきたのかを知ることができる。山下・野島はこのような思い出が持つコミュニケーション機能を「思い出コミュニケーション」と名付けた[山下, 野島 2001]。市民が思い出を語る場を博物館に提供することは、市民が持つ記憶により展示物の新しい解釈を生むだけでなく、市民同士のつながりを深め、地域活性化にも繋がるだろう。

著者らの住む函館市には明治期の都市写真が多く残されている。これらの歴史資料は都市の記憶を豊富に含む素材であり、市民の思い出コミュニケーションの素材として有効であると考えられる。そこで本研究では、明治期の都市写真を鑑賞する際の思い出コミュニケーションを促すために必要な要素を明らかにすることを目的とする。

#### 1.1 プローブスタディ

研究方法としてプローブスタディを用いる。プローブスタディとは簡単な仕掛けや情報技術を現場に投入することで現象を検証する方法である。本研究では、プローブとして簡単な仕掛けを展示空間に取り入れ、その効果を検証する。

#### 1.2 函館における古写真研究

函館市には国が指定した伝統的建造物群保存地区があり、

明治末期から昭和初期にかけての建造物が多く現存している。中でも函館西部地区は函館発祥の地とされており、函館市中央図書館には明治期の西部地区の街並みを撮影したパノラマ写真が計 13 点所蔵されている。このような広範囲の街並みを俯瞰して撮影した写真資料は、写されている建造物を特定するのが難しいとされてきた。しかし近年、市立函館博物館の学芸員や市民ボランティアによる研究が進み、パノラマ写真内に写る建造物の特定やその変遷が明らかになった[吉田 2011]。これにより、明治期の西部地区の建造物は何度も再建を繰り返しているが、場所は現在も変わっていないものが多く、地形や主要な道は大きな変化がないことがわかってきた。

K・リンチは都市のイメージの視覚的な構成要素を path, edge, district, node, landmark の 5 つに分類し、これらが重なり合い組み立てられてイメージを作り出しているとした[Lynch 1968]。これらの要素を明治期の函館のパノラマ写真に当てはめると、海岸や山麓(edge)、電車通りや坂(path)、主要な建造物(landmark)が含まれており、これらは現在と大きな変化はないことがわかる(図 1)。ここから、明治期の函館のパノラマ写真は現在の函館のイメージを構成する要素を十分に持っていると考えられる。

以上から、本研究では明治期の函館を俯瞰的に撮影したパノラマ写真に着目し、これを鑑賞者が持つ現在の函館のイメージと結びつけることで、明治期という鑑賞者から遠い時代の都市写真からも思い出の語りが生まれると考える。



図 1 明治 25 年の函館のパノラマ写真  
(撮影: 田本研造, 所蔵: 函館市中央図書館)

### 2. 事前調査

現状で博物館において生まれている鑑賞者間のコミュニケーションの容態や、明治期のパノラマ写真を鑑賞する際に鑑賞者がどのように場所を理解しようとするのかを明らかにするため調査を実施した。

#### 2.1 市立函館博物館でのフィールド調査

2015 年 5 月 25 日に市立函館博物館第三展示室にて来館者の様子を観察した。その結果、来館者が昭和時代の函館市街全景図を鑑賞する際には、「電車通りはこの道だから」「ここが公会堂だから」と発話し、自分が知っている現在の path や landmark を特定しようとする様子が何度も観察された。ここから、

自分が持つ函館のイメージを絵図の中から探していることがわかる。一方で、明治 25 年のパノラマ写真の展示を鑑賞する際は、鑑賞者間に会話はほとんど発生していなかった。これは、明治 25 年のパノラマ写真の展示には建物に関する解説や地理的情報がなく、明治期を生きていない鑑賞者にとっては場所の理解が難しいことが原因であると推測される。

## 2.2 「古写真・古地図を歩く」講座の観察

2015 年 6 月 17 日に市立函館博物館で開催された「古写真・古地図を歩く」講座の観察を行った。参加者は 60 代女性 11 名、60 代男性 11 名であった。学芸員と説明役の 2 名は参加者に対し明治 25 年のパノラマ写真の解説を行った(図 2)。



図 2 古写真講座の様子(市立函館博物館集會室)

説明役が「今は東本願寺があるところ」「今は元町配水場があるあたり」などと現在の建物名を landmark として提示しながら解説すると、多くの参加者がその場所を理解したように何度も頷く様子が観察できた。さらに、現在の金森倉庫付近の解説では、「ラッキーピエロ(ハンバーガーショップ)がある場所」と発話すると、多くの女性参加者は「ああ、あそこね」という反応を示したが、男性参加者の反応は薄かった。その様子を受けて説明役が続けて「変則交差点の場所です」と発話すると男性参加者も頷く様子が観察された。また、説明役が当時の噴水を解説する際に、参加者が子どもの頃に噴水で遊んだ記憶が思い起こされ「あの頃楽しかったよね」という思い出の語りが生まれていた。

以上から、説明役が landmark を利用して解説すると参加者の場所の理解が進んでいたことがわかる。また、場所を理解することによって鑑賞者が思い出を想起されることがあるとわかった。しかし、同じ場所を説明する場合でも参加者間に認識の違いが出ることもあるといえる。今回は男性群と女性群で違いが出たが、世代や函館の居住年数によっても使用する landmark に違いが出る可能性が示唆された。

## 2.3 ランドマーク調査

明治期とは遠い世代の若者がパノラマ写真を鑑賞する際にどのような landmark を用いて場所を理解しようとするのかを明らかにするため、大学生に対し調査を実施した。調査は 2015 年 7 月 31 日と 2015 年 8 月 5 日に行い、1 回目は大学 4 年生 3 名(A, B, C)、2 回目は大学 1 年生 5 名(D, E, F, G, H)に対して行った。参加者には印刷した明治 25 年のパノラマ写真の中から実験者が提示する場所(金森レンガ倉庫、公会堂、ハリストス正教会の3箇所の観光地)を探してもらった。その際、参加者同士で協力して全員が納得のいく場所を回答するよう指示した。

第 1 回の参加者 C は函館出身、A, B は函館以外出身だった。以下の発話から、C が「西高」という高校の名前を出す、A と B は理解できていない様子が伺える。

A: 八幡坂ってさ、あの下から見たらさ、あの、金森領事館

(金森レンガ倉庫)とかの前に止まっている船が真ん前に見えるとこでしょ?

C: あー、したら西高のとこか。

A: ん?

C: 西高のところから見たらさ、摩周丸見えるところじゃん。

B: 摩周丸見えるの?

A: そうなんだ?

図 3 に探索地付近の地図を示す。地図からもわかるように、A と C は同じ場所について発言しているにもかかわらず、A は C の発言が理解できていない。これは、2.2 で述べた古写真講座と同様に、同じ場所を説明していても認識に差が出ることを表している。今回は函館出身者の C が使用する landmark が A に伝わっていない。

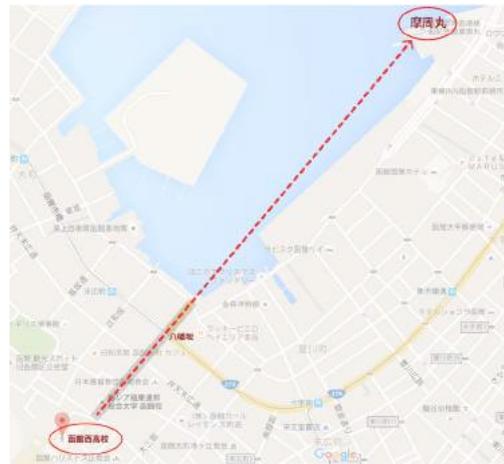


図 3 西高、八幡坂付近の地図

また以下の発話から、以前その場所を訪れた際の記憶を頼りに探索している様子が観察できた。

D: なんかずつとさ、こう来て上がるよね

G: 上がる。

F: 坂の上ってイメージある。

G: 坂の上だよ。

F: 坂の上まで頑張って上がって、もうすぐ着くって感じ。

E: うん、そうだ。

D: こころへん?

F: ここの坂だよ。

G: ここの坂か。

D: こんなにさ、金森から近かったっけ?

G: そんな近くないような気がする。

D: もうちょっとこっちはないか?

F: いやでも、歩いて行ったからな、修学旅行全部。

さらに、以下の発話から参加者 C が以前 A, B とその場を訪れたときの出来事を語ることで探索中の地点を伝えようとしていることがわかる。

C: ここの坂登ってきて、ここで自由の女神見たじゃん。

A: うんうんうんうんうん、あったね。

C: で、この横通って、なんかこのへんにちっちゃい店あって、このへんでチューチュートレインしたじゃん。

A: そうだっけ？

B: 坂撮るときのね。坂の写真撮るときのチューチュートレイン。

以上から、明治時代を直接体験していない若者でも、その場を訪れたことがあれば記憶を頼りに場所を理解することができることがわかった。また、他の参加者に場所を理解させるために共通の思い出を語って説明をしていた。ここから、探索することは鑑賞者間の思い出の語りを促すと考えられる。しかしその際に landmark を用いて説明することは効果的ではあるが、居住年数によって理解出来るランドマークが異なることがわかった。

## 2.4 調査から得た要素

調査から、明治期のパノラマ写真を鑑賞する際に鑑賞者の思い出の語りを引き出すためには、path や edge などの地理的情報を現在と結びつけること、適切な landmark を提示し鑑賞者の探索を促すことが効果的であると考えられる。これらの 2 点の要素をプローブとして取り入れた展示空間を市立函館博物館に制作し、その効果を検証する。

## 3. 制作した展示空間

市立函館博物館情報ブース「未来」に、明治 25 年に撮影された函館のパノラマ写真を用いた展示空間を制作した(図 4)。情報ブース「未来」は、市立函館博物館と公立ほこだて未来大学の連携事業として 2014 年に開設された。同館の保科学芸員の発案で、来場者が展示ケース内に入るという新しい鑑賞体験の提供する展示空間として活用されている。この展示空間に調査から得た要素である、path や edge などの地理的情報を現在と結びつけ、適切な landmark を提示し鑑賞者の探索を促すためのプローブを 2 点取り入れた。制作した展示空間は「パノラマで見る明治と今の函館」と題し、2015 年 10 月 3 日より一般公開した。



図 4 制作した展示空間

### 3.1 プローブ①: 明治期と現在のパノラマ写真の展示

明治期と現在の地理的情報を結びつけるためのプローブとして、明治 25 年と現在のパノラマ写真を印刷し、展示室内の壁に上下に設置した(図 5)。明治期と現在の同じ場所を重ねて比較できるように、海岸や山麓の edge、坂や電車通りなどの path を基準線分として上下に一致するように設置した。

明治 25 年のパノラマ写真は、平成 23 年に函館市中央図書館で発見されデジタルデータ化されたもので、明治 25 年に田本研造によって薬師山砲台跡からガラス乾板を用いて撮影されたとされている。現在の函館のパノラマ写真は平成 27 年に川嶋稔夫によって、デジタルスチールカメラを搭載した自動撮影雲台 GigaPan を使用して函館山ロープウェイ屋上展望台から撮影された。



図 5 パノラマ写真の展示

### 3.2 プローブ②: 建物探索パネル

鑑賞者の探索行為を促すためのプローブとして、パノラマ写真の中から landmark となる建物を拡大した「建物探索パネル」を設置した(図 6)。現在のパノラマ写真から拡大したものを 8 枚、明治時代のパノラマ写真から拡大したものを 18 枚、計 26 枚制作し、その内 17 枚を設置できるようにした。鑑賞者がパネルを手に持ち、明治と現在のパノラマ写真の中から建物を探索するようキャプションで説明を加えた。建物探索パネルに使用した建物は著者が行った観察の中で landmark として活用できると判断したものである。



図 6 建物探索パネル

## 4. 実験

展示空間にプローブとして投入した要素の効果を検証するため実験を行った。

### 4.1 方法

実験は 2015 年 10 月 21 日、市立函館博物館情報ブース「未来」にて行った。被験者は大学生 2 名(G1, G2)と、60 代 3 名(L1, L2, L3)の 2 グループであった。被験者には情報ブース内に入ってもらい自由に鑑賞してもらった。大学生グループには鑑賞の様子を撮影した動画を見ながら発言の意図を振り返るインタビュー(retrospective report 手法)を実施した。鑑賞の様子はビデオカメラ 2 台と IC レコーダー 1 台で記録した。

### 4.2 結果と考察

#### (1) 発生した思い出コミュニケーション

大学生の発話の一部を以下に示す。大学生の発話では、現在函館に存在するコーヒースタンドに関する語りがあった。この発話は被験者 G1「カールレイモン」という店を写真から発見することがきっかけで生まれたものである。この会話では、その時に流れていたラジオや店員の様子などを細部まで語る様子が観察できた。実験後のインタビューで被験者 G1 は「ラジオの曲が流れていたことを思い出した」「コーヒータンが美味しかったのが印象的だった」と話している。

G1:この一本道の、ここにカールレイモンがあるんだけどね。  
G2:ああ。  
G1:ここにね、ちょっと中に入ってたところにね、303 っていう  
コーヒースタンドがあってね。  
そこのコーヒーが美味しいんですよ。  
G2:まじで？  
G1:なんかお店作ってるところで完全に外で飲むスタイル  
なんだけど。  
G2:へえ、そうなんだ。  
G1:このへん通るとラジオの曲みたいのが聞こえてきてね。  
G2:うん。  
G1:よく見ると看板 303 こっちみたいを書いてあってね。  
G2:へえ。  
G1:細い道を通って行くとね、もっと入れれば若いお兄さんが  
出迎えてくれる。  
G2:なんか地味に一本入ったらお店あったりするんだよね。  
G1:今度一緒に行く？  
G2:まじで？やった。

また、以下に 60 代グループの鑑賞で生まれた発話の一部を  
記述する。被験者 L1 はこのとき祖母の発言を思い出している。

L1:私のおばあさんがね、それこそ若い時。  
L2:うん。  
L3:うん。  
L1:牛乳配達してたんだって。  
L2:うんうん、ああ、おばあさんが若い頃。  
L1:うん、そうそうそう。  
L2:は一、うん。  
L1:そしたらね、あの、今の裁判所のあたりはね、  
湿地だったって言ってた。  
L2:ああー。  
L3:湿地ね。  
L1:うん、湿地だったってね。  
L2:私たち住んでる今あそこだって砂だからね。  
L1:うん、そうそうそう。  
L2:砂浜だったってみんな。

以上から、大学生はここ最近の出来事についての思い出の  
語りや未来の約束をしているのに対し、60 代女性の鑑賞では、  
祖母の話や自分が生まれた頃の話のように比較的昔の思い出  
を語っていることがわかった。

#### (2) プローブとして取り入れた要素の効果

大学生と 60 代グループでは鑑賞方法に大きな違いが出た。  
2 グループとも上下に明治と現在のパノラマ写真を見比べるよう  
に鑑賞していたが、大学生グループは終始建物探索パネルを  
使用していたのに対し、60 代グループはほとんどパネルを使用  
しなかった。これは函館に 60 年以上住んでおり、土地勘がある  
ためパネルに頼らなくても path や edge から場所を理解でき、  
思い出の語りが生まれていたと考えられる。しかし、前述の通り  
大学生グループにも思い出コミュニケーションは生まれていた。  
これはパネルを使用して探索することで、自然と細部まで見るこ  
とができており、写真の中から自分が訪れたことがある建物を発  
見することが思い出を語るきっかけになっていたと考えられる。

また、大学生 2 名の間にも鑑賞方法に違いが出た。被験者  
G1 が多く発言するのに対し、被験者 G2 は聞き役に回るこ  
とが多かった。また、それぞれが建物探索パネルを選び、別々に探

索している場面もあった。実験後インタビューでは、被験者 G1  
は写真に写っている地域に月に 2 回は訪れるのに対し、被験  
者 G2 は年に数回と極端に少なかった。ここから、被験者間には  
写真に写っている地域に訪れる頻度に大きな差があり、2 名の  
間に土地勘や知識の差があったと考えられる。被験者 G1 は、  
実験後インタビューで沈黙時の様子を「自分一人で楽しんでい  
る」と振り返った。被験者 G2 は「自分の想像する函館との違い  
や土地勘のズレを感じていた」と説明した。ここから、被験者 G2  
は函館に関して全く知識がないわけではなく、自身のイメージ  
する函館を持つてはいるが、明治時代の函館と結びつけること  
ができておらず戸惑いを感じていたことがわかる。したがって、  
鑑賞者間に知識差や経験量の差がある場合は語り合いが生まれ  
にくく、建物探索パネルの選び方にも違いが出ていたと考え  
られる。

以上から、明治期のパノラマ写真を鑑賞する際に、path や  
edge などの地理情報を現在と明治期で比較できるようにすること  
で、現在の函館のイメージと結びつけることができていた。大  
学生のような函館での体験が少ない鑑賞者は建物探索パネル  
で landmark を写真内で探索することで、細部まで見ることが促  
されていた。しかし、今回制作した建物探索パネルは鑑賞者間  
の知識差を埋めることはできず、逆にコミュニケーションを阻害  
していた可能性も示唆された。したがって、探索するという要素  
をどのような形で取り入れるかは今後検討が必要であると考え  
る。

## 5. まとめ

本研究は、明治期の都市写真を鑑賞する際に、鑑賞者の思  
い出コミュニケーションを引き出すために必要な要素を明らかに  
するため、市立函館博物館に制作した展示空間で実験を行っ  
た。展示空間には、path や edge などの地理的情報を現在と  
結びつけ、適切な landmark を提示し鑑賞者の探索を促すため  
のプローブを取り入れ効果を検証した。その結果、地理的情報  
を現在と結びつけることで、鑑賞者の持つ函館のイメージと明治  
期の函館を繋げられていた。探索させるという要素は土地勘の  
あまりない大学生の思い出の語りを促進していた。探索のため  
の道具に検討を加えることで、より鑑賞者の思い出コミュニケー  
ションが促せることが示唆された。今後はパネルに建物の解説  
を加えるなどの改良を行い、知識差があった場合でも共同鑑賞  
が促される道具の検討を行っていく。

## 参考文献

- [川嶋, 木村 2011] 川嶋稔夫, 木村健一: 市民と編みあげる地  
域デジタルアーカイブ, 人工知能学会全国大会論文集  
25, pp.1-4, 2011.
- [山下, 野島 2001] 山下清美, 野島久雄: 思い出コミュニケー  
ションのための電子ミニアルバムの提案, ヒューマンインタフ  
ェースシンポジウム論文集, pp.261-264, 2001.
- [吉田 2011] 吉田忠博: 函館の建築物の変遷について 一大  
正初期撮影「函館全景」写真内の建築物を中心に一, 市立  
函館博物館研究紀要 21, pp.19-40, 2011.
- [Lynch 1968] ケヴィン・リンチ, 丹下健三・富田玲子訳: 都市の  
イメージ, 岩波書店, 1968.